
ルネ・マグリットの印象派的作品群(1940年代)における墓の形象
—《彼岸》(1938年)との関連について—

1943年から1947年にかけて、ルネ・マグリットはそれまでに確立していた写実主義的手法を放棄し、とりわけ晩年のルノワールを想起させる印象派風の技法を用いて制作を行った。対象の奇妙な組み合わせを印象派風に描いたそれらの作品に対する評価は当時から低く、全体主義に覆われた暗い社会状況のなかでマグリットが明るさや悦びを追求した反動的試みとして理解されてきた。こうして主に技法の拙さから例外的時期として括られた作品群は、個々に描かれた対象ないし形象についての考察を十分には受けてきていない。そこで本発表は、印象派に倣ったこの時期の制作意図を明らかにする試みとして、これらの作品にしばしばモチーフとして墓が描かれていることに注目する。そしてその必然性を理論的背景に探ることを通じて、この時期に先立つ1938年の《彼岸》とそれらとの関連を考察する。

印象派的作品群のなかで墓および墓を連想させる形象が描かれているのは《幸運》、《微笑み》、《ゴルゴン》等であるが、本発表はさらに《千一夜物語》と《火の大地》において二本の柱が描かれていることにも注目し、このモチーフを図像学的に墓に類するものとして理解する。こうして印象派的技法によって墓の形象が頻繁に描かれていた事実を確認すると、少なくともこれらには、明るさや悦びの追求という言葉によっては説明しきれない動機があると考えられる。

そこで本発表は理論的背景を明らかにすべく、1946年から翌年にかけてマグリットが印象派的絵画を正当化するために執筆した一連の論考から、彼が繰り返し主張した知覚論に注目する。知覚可能なものとそこから逃れるものとを対比的に捉え、前者に留まりつつも両者の相互関係をこそ把握すべきだと主張する彼は、印象派的な視覚の在り方をこの知覚論に依拠させていることがわかる。この理論的背景をふまえれば、印象派的技法を用いながらモチーフに墓を選ぶという手法は、知覚とそこから逃れるものとの関係性を問うために採用されたことが推測される。

この推測を裏づけるのが、1938年に写実的手法で制作された《彼岸》である。「太陽」を問題とすることから得られたこのイメージは、広大な大地に置かれた墓が真上から太陽に照らされている白昼の情景を表わしている。マグリット自身の注釈と絵を突き合わせれば、この作品で彼が示したのは、画面内で太陽に照らされる生の領域と、画面外に指し示された死との対比的関係であったことがわかる。ここには、印象派的制作を根底で支えることになる知覚論が、太陽と墓という対象の組み合わせにおいて結節していると考えられる。

以上の考察をふまえ、墓をモチーフとする印象派的諸作品が《彼岸》を引き継ぐものであることを指摘する。マグリットは太陽の光の表現を技法に託すことによって、後者に結節した知覚論をさらに先鋭化させたと理解することができよう。